大間病院
院長　一戸　雅之

手きず（創傷）の治療について

暖かい日も多くなり、外で畑仕事をしたり山に入ったりする機会が増えた方も多いと思います。今回は暖かくなると患者さんが増える「きず」のお話です。

「切り傷」や「すり傷」などの治療はここ10年で大きく進歩しています。以前は消毒薬で消毒し、乾燥することが常識でした。しかし最近は消毒薬は使わず、水での洗浄と被覆材（創傷をおおう材料）による湿潤療法（適度なうるおいを保つ治療）が推奨されています。

・消毒薬について

以前は化膿（感染）を防ぐ目的で創傷を消毒していましたが、

(1)　消毒薬は傷を治そうとする皮膚の細胞に害があること
(2)　消毒薬で細菌を完全になくすことができないこと
(3)　皮膚に少し細菌がいても傷は治っていくこと

などが分かってきて、消毒することで痛い上に傷の治りが遅くなるとされています。

消毒よりも、傷にいる細菌や異物（土・砂やガラスなど）をしっかりと洗い流すことが感染を減らすために重要です。水道水などでしっかりと傷を洗います。不十分な洗浄は感染を減らしませんので、深いまたは広い傷などで痛みが強く洗浄できない場合は病院で局所麻酔をして洗浄します。

・きずの乾燥

けがをすると傷から出血して、それが固まって痂皮（かひ、かさぶたのこと）をつくります。皮膚の細胞は乾いてしまうと死んでしまいます。そのため、かさぶたに守られたその下の乾きにくい部分で何とか細胞を増やして治そうとします。しかしかさぶたは剥がれやすく、剥がれると細胞が乾き、傷の治りは遅くなります。

そこで傷を乾燥させない湿潤（しつじゅん）状態をつくって傷をおおう被覆材が開発されてきました。湿潤状態では細胞は生き生きと増え、けがでえぐれた部分も埋めて皮膚がおおわれていきます。そしてかさぶたができた傷よりもきれいに治ります。以前はきずを乾燥させる市販薬もありましたが、現在は推奨されていません。

・けがをした時

出血している場合にはきれいなガーゼやタオルでしっかりと５分から10分抑えて止血をします。途中で傷の様子を見ると血は止まりませんので、しっかりと長く抑えることが重要です。神経や血管の損傷につながったり、逆に出血を増やすこともあるためヒモなどでしばることはやめてください。ある程度止血した後は水道水できれいに洗浄をしてください。小さな切り傷やすり傷の場合、ドラッグストアで被覆材は購入ができますので、ご自宅でも処置が可能です。

しかし、深い傷や出血が多い傷、痛みや腫れがおさまらない傷、動物に咬まれた傷や砂や土が入った傷などはご自身で判断せずに必ず医療機関を受診してください。